

日本古代官僚人事データベースの構築と活用

お茶の水女子大学 遠藤みどり

近年、人文学研究におけるデータサイエンスの活用（文学、言語、芸術の数理的分析）や人文学的資料のデジタル化とその活用（デジタル・ヒューマニティーズ）の進展が著しく、さまざまな分野で「モノからコトへ」の転換が起きている。歴史学分野でも「歴史情報学」という新たな分野が提唱され、歴史資料のデジタル化やデータベース構築を中心に、これまで紙媒体（モノ）で利用してきた資料のデジタル媒体（コト）への転換が図られている。ただ、現在行われているデジタル化や検索のためのデータベース構築は、従前の「史料集」や「目録」、「索引」のデジタル版であり、歴史学研究における史料収集に関わるもので、データ化された史料を使った数理的分析などは、ほかの人文学分野に比べてあまり進んでいないのが現状である。

そこで、歴史学へのデータサイエンス活用の試みとして着目したのが、人事データベースの作成である。現在、作成・公開されているデータベースの多くは、キーワード検索などによって史料の所在を探すことを目的にしているのに対して、本研究で作成を試みる人事データベースは、過去の人物の人事記録を統計データとして集積し、ある組織の任意の時期の人員構成（総数・等級別人数・男女比・年齢比など）を抽出できる分析ツールである。従前の「人名辞典」や、各種辞典類の巻末付録にある図表などの基礎データのデジタル版のようなもので、任意に条件を変更することで様々な状況をシミュレーションすることができ、これまでの紙媒体を中心とした分析とは異なる、長期的で広範囲の分析が可能となると考えている。

本報告では、比較的長期間にわたって、同質な情報を入手できる日本古代の官人の叙位・任官記録を利用した上記の試みの一端を紹介する。日本古代の官人の叙位・任官は、701年の大宝律令および、その改定である養老律令に定められた方式によって行われ、その記録は政府の公式歴史書である『続日本紀』以降の五国史に細かく残されている。大宝律令施行から『日本三代実録』が記す光孝朝（9世紀後半）までの約200年の記録のうち、現在は『続日本紀』（8世紀）の収集・分析を進めているところである。具体的には、史料から人事に関する記録を網羅的に収集し、項目ごと（日付・官人名・現位階・新位階・現職・新職など）に整理したうえで、統計分析ソフト“R”を使って、官人の個人録やその変遷表、官人総数や男女別・位階ごとの人員変動などのデータを抽出している。

なお、本報告における、“R”での分析を行うためのプログラムは、本学文理融合 AI・データサイエンスセンター特任講師の土山玄氏が作成したものである。